

# 「諸行無常」・「盛者必衰」と経論

— 『平家物語』序章をめぐる —

沼 波 政 保

はじめに

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。おこれる人も久しからず、只春の夜の夢の如し。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ<sup>①</sup>。(巻一・「祇園精舎」)

言うまでもなく、古来人口に膾炙してきた『平家物語』序章であり、『平家物語』全体のテーマを語るだけでなく、『平家物語』の哀調を語るに相応しい文章である。

この序章における「諸行無常」及び「盛者必衰」の両句については従来から多くの解説がなされてきたが、その出典について今、日本古典文学大系本(昭和三十四年二月・岩波書店)を見ると、補注において、

諸行無常は、仏典で有名な四句の偈、即ち、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂の第一句を指す。

と指摘し、さらに『祇園図経』に説く祇園精舎の無常堂の鐘にまつわる伝説に触れている。「盛者必衰」の句についても同じく補注を置くが、その出典は明らかにされず、『涅槃経』における仏涅槃の光景に触れるのみである。

一方、新日本古典文学大系本（一九九一年六月・岩波書店）では、「諸行無常」の句について脚注において「涅槃経・聖行品に見える偈の一句」とし、「盛者必衰」の句についても同じく脚注に「仁王経・護国品に見える句」と、それぞれ出典を指摘している。

「諸行無常」の句については古典大系本も『涅槃経』をはじめ多くの経典にその出典が求められることを承知した上で「仏典で有名な四句の偈」としたのであるが、「盛者必衰」の句の出典については古典大系本では明らかにされず、新古典大系本に至って『仁王経』『護国品』にあることが指摘されている。「盛者必衰」の句の出典が『仁王経』『護国品』であることを指摘したのは『平家物語略解』であるが、すなわち、無常・苦・空・無我の四非常が説かれる、いわゆる「四非常偈」の第三偈の「空非常」の中にみられるのである。

この「諸行無常」及び「盛者必衰」の両句が、『平家物語』が語ろうとするところの無常観を表わす句として重視されてきたことは当然であるが、この両句は表現上は対句をなしている。しかし、仏教教理を説く上で対をなす句であるのかどうかについては、未だ明らかにされていない。また、もし対をなしていないならば、この両句を『平家物語』の冒頭という重要な位置において語ったその出典は何か。この点をきつかけとして、拙稿はこの二句について経典・論釈・疏・註を少しく検証してみたい。

「諸行無常」の句は新古典大系本の指摘を待つまでもなく、『大般涅槃経』『聖行品』に見られるところの、俗に

四句偈と称されて広く知られた句であり、その他『別譯雜阿含經』・『過去現在因果經』をはじめ多くの經・論・釈・疏等に見られるが、「諸行無常」の用例数を大正大藏經に見ると、実に五五四例を数える（以下、用例数はすべて大正大藏經における数である）。そのうち「諸行無常 是生滅法」と二句を続けるものは一三三例ある。さらにその中で、『往生要集』で「大經偈云」として四句偈を引いているように、四句すべてが用いられている箇所は四一例ある。

また、四句を挙げていることには違いないが、若干字句の異なったものが見られる。『大悲經』では

諸行無常 是生滅法 生已還滅 滅彼為樂<sup>2)</sup>（第二卷・九五二頁c）

となっており、『成唯識論了義燈』では

諸行無常 是生滅法 是生必滅 寂滅為樂（第四十三卷・六七〇頁c）

となっており、『大悲普覺禪師語錄』では

諸行無常 是生滅法 生滅既滅 寂滅現前（第四十七卷・八一四頁c）

となっているが、すべて大意に違いはない。

また、『別譯雜阿含經』では、四句偈をそのまま用いている箇所ほかに

諸行無常 是生滅法 生滅滅已 乃名涅槃（第二卷・四一三頁c）

という四句偈を挙げているが、これは釋提桓因が説いた偈となっている。同じく『別譯雜阿含經』の他の箇所には

諸行無常 是生滅法 無有住時 不可保信 是壞敗法（第二卷・四八八c）

という偈が二ヶ所に見られるが、これは世尊の説法である。

さらに『佛説薩鉢多酥哩隴捺野經』では

諸行無常 是生滅法 無堅無實 是不究竟 是不堪任 是不可樂（第一卷・八一頁c、八二二頁a）  
 という句になっており、二ヶ所において説かれている。

「諸行無常、是生滅法」の二句のみが用いられているのは八六例あるが、後秦釋道朗撰の『大般涅槃經』や他の經論にも「半偈」とある場合が多いように、四句偈を説く中で前半の二句を挙げて説いているものが大部分である。

## 二

次に「諸行無常」の句に続く句が「是生滅法」ではない用例についてみると、まず「諸行無常 諸法無我」と続く用例が二二例ある。このうち「諸行無常 諸法無我 涅槃寂靜」と続く用例が最も多く、『佛説法身經』をはじめとして一一例ある。今、『阿毘達磨大毘婆沙論』にみられる二例のうちの二つを例示する。

佛以百福莊嚴相手。摩彼象頂。便以象語而爲説法。諸行無常諸法無我涅槃寂靜。汝應於我起敬信心。不久必得脱傍生趣。象聞法已起敬信心。厭離象身不復飲食。命終生在三十三天念荷佛恩。來詣佛所。（第二十七卷・

四二九頁a）

王舍城において、仏を害せんとした象に対して仏が「諸行無常 諸法無我 涅槃寂靜」を説き、信心を起すことを説いたというのである。また『大日經疏鈔』にも「諸行無常 諸法無我 寂靜涅槃」（第六十卷・二四二頁

b)とあるが、全く同様の用例と言ってよからう。

さらに、「諸行無常 涅槃寂靜 諸法無我」と三句の順が異なっている用例が『大日經疏演奧鈔』をはじめ『大日經疏』関係の三書にみられるが、すべてこれらを「三法印」としており「有漏皆苦」を加えて「四法印」と説いているので、単に羅列しただけで、順序の違いに意味はない。

この三句と同義ながら一字異なるのが「諸行無常 諸法無我 涅槃寂滅」という用例であって、これは『根本説一切有部毘奈耶』をはじめ五例みられる。『根本説一切有部毘奈耶』では二例みられるが、その一つは先の『阿毘達磨大毘婆沙論』とほぼ同じ内容で、獅子に対して仏が説いている(第二十三卷・八三六頁b)。

また、「諸行無常 諸法無我 涅槃是寂滅法」という三句目が異なる例が『阿毘曇毘婆沙論』に一例ある(第二十八卷・三三二頁b)。内容は先に触れた『阿毘達磨大毘婆沙論』と同様である。また、『大日經指心鈔』には「諸行無常 諸法無我 我等法印也」(第五十九卷・六七九頁b)とあるが、これは二句を以て自分たちの「法印」とするものである。この用例はここを含めて二例ある。

さらに、『根本説一切有部毘奈耶雜事』には「諸行無常 諸法無我 寂滅為樂」(第二十四卷・二二七頁c)と四句偈の二句と同じであるが、「三句法」としており、不完全な四句偈ではあるが、これはこれで三句で完結しているのである。

このように、「諸行無常」という句は四句偈を踏まえてまさに無常を説く句として、多くの經・論・釈・疏等に見られ、先に述べたように実に五五四例を数えるが、ほとんどが四句偈もしくはその半偈であり、「諸法無我」の

句へ続く用例も少しみられ、これもわずかながら慣用されたことが推測される。しかし、「諸行無常 盛者必衰」と続く用例はなく、続かなくても同時に説かれている箇所もない。つまり、「諸行無常」と「盛者必衰」を対として説いているものは見当たらないのである。

また、「生者必滅」の用例は二十四例ある。そのうち、「生者必滅 一向記故」と続く用例が『涅槃宗要』（第三十八卷・二四八頁a）をはじめ七例ある。しかし、「諸行無常 生者必滅」と続く用例はない。「生者必滅」・「盛者必衰」に似通った「生者必衰」・「盛者必滅」は用例そのものがなく、よってそれらが「諸行無常」に続く用例は、もちろんない。

## 三

次に「盛者必衰」という句の用例についてみてみよう。「盛者必衰」の用例は全部で一五例ある。「諸行無常」の句に比してあまりにも用例が少ないが、「盛者必衰」は「諸行無常」を説く中の一例として「盛」の無常を説くものであるからであろう。

そのうち、『佛説仁王般若波羅蜜多經』『護国品』には普明王に一法師が説いた偈があり、そこに「盛者必衰」の句がみられる。

有本自無 因縁成諸 盛者必衰 實者必虚 衆生蠢蠢 都如幻居（第八卷・八三〇頁b）

この箇所を『平家物語』の「諸行無常」の句の出典と指摘したのは『平家物語略解』であったが、渡辺貞麿先

生はこの『仁王経』の偈によって『平家物語』が説こうとする無常觀を捉えられたのである。

一切のものは因縁(条件)によって成り立つがゆえに(したがって、条件によって変化するがゆえに)、あると思われるものは、本来、無なのである。とすれば、「実者必虚」が推移をいうのではないことはもちろんのこと、「盛者必衰」もまた、ただ単なる盛から衰への推移をいうのではない。「盛」は、因縁によって成り立つがゆえに、やがてかならずおとろえる。その、やがておとろえねばならぬ「盛」の状態には、それ故に、たしかな実体というものではないのである、ということを読説く言葉が「盛者必衰」なのであった<sup>3)</sup>。

さて、引用したこの『仁王経』「護国品」の偈の部分と同文の例は、『六度集経』・『賢愚経』をはじめ『仁王般若経疏』・『経律異相』等、合せて七例みられるが、『六度集経』では該当箇所最後の句「都如幻居」が「都縁幻居」となっている(第三卷・二三頁a)。しかし「有本自無」から「衆生蠢蠢」までは同文であるから、『仁王経』と同文の例に含めてよからう。また、『大方廣佛華嚴経隨疏演義鈔』は

盛者必衰 實者皆虚 衆世蠢蠢 都如幻居 (第三十六卷・五九七頁c)

とわずかな違いがあるが、大意において『仁王経』と同じであると言えよう。

その他、『仁王経』の偈は引かず単独で「盛者必衰」が説かれている用例は七例みられる。

- ・一切会合皆歸磨滅。萬物無常盛者必衰。君速捨此事。(『三法度論』・第二十五卷・一二二頁c)
- ・盛者必敗盛者必衰謂之非常(『陰持入経註』・第三十三卷・一〇頁a)
- ・盛者必衰人非常(『見桃録』・第八十一卷・四七一頁b)

・盛者必衰雖示鶴樹滅於甘蔗氏（同・同頁c）

そして、『仁王般若經疏』は先に触れたように『仁王經』と同文の箇所が続いて、それぞれの句を説明していく箇所で「盛者必衰」は単独で掲出されている（第三十三卷・三四六頁a）。

また『溪風拾葉集』では南岳の「無常偈」として

有生有滅 有樂有苦 盛者必衰 會者必別 命草上露 身風前燈 無墓此世 無憑我身（第七十六卷・八七三a）

と出す。これは、冒頭に掲出した『平家物語』の序章との関係で非常に興味があるが、この点については後述する。七例目として、蓮如の御文にある。

静におもんみれば、それ人間界の生をうくることは、まことに五戒をたもてる功力によりてなり。これおほきにまれなることぞかし。たゞし人界の生はわづかに一旦の浮生なり、後生は永生の樂果なり。たとひまた榮花にはこり榮耀にあまるといふとも、盛者必衰會者定離のならひなれば、ひさしくたもつべきにあらず。

（二帖目第七通・真宗聖教全書三・四三五頁）

この中で蓮如は、「盛者必衰」の句に続けて「會者定離」の句を述べているが、「盛者必衰 會者定離」と続く用例は他の經・論・釈・疏等にはみられない。



#### 四

ところで、「會者定離」という句は『平家物語』中にもみられる。都に残した妻子に会いたいために屋島から脱出した平維盛は、囚われの身となることを恐れて入京をあきらめて高野山へ向う。高野で灌口入道のもとで出家した維盛は、那智の沖で入水する。その時の維盛の言葉である。

たかきもいやしきも、恩愛の道はちからおよばぬ事也。なかにも夫妻は一夜の枕をならぶるも、五百生の宿縁と申候へば、先世の契あさからず。生者必滅、會者定離はうき世の習にて候也。末の露もとのしづくのためしあれば、たとひ遅速の不同はありとも、おくれさきだつ御別、つみになくてしもや候べき。(卷十二「維

盛入水」)

ここでは「會者定離」は「生者必滅」の句に続いていますが、「生者必滅 會者定離」と続く用例は、經・論・釈・疏等にはみられない。

この「生者必滅」について古典大系本は「本朝文粹・和漢朗詠集にみえる句」と頭注する。また、卷二「小教訓」に語られる「盛者必衰」の頭注に「本朝文粹十四、大江朝綱の願文と和漢朗詠集下、無常にある」としてその文を引くが、「小教訓」の本文では「生者必滅」でなく「盛者必衰」である。これについて古典大系本の頭注はもつとも、朝綱の文ならば、「盛者必衰」ではなく「生者必滅」とあるはずだが、この二つを混同したのである。

というが、『平家物語』の「小教訓」の該当箇所を『本朝文粹』と結びつけるのには疑問がある。

今、『本朝文粹』から引用する。

「生者必滅、釈尊未免旃檀之煙、樂尽哀来、天人猶逢五衰之日」。

この『本朝文粹』（もしくは『和漢朗詠集』）の文が『平家物語』に受け入れられていたであろうことは、卷十  
一「大臣殿被斬」にも

「生あるものは必滅す。釋尊いまだ旃檀の煙をまぬかれ給はず。樂盡て悲来る。天人尚五衰の日にあへり」と  
こそうけ給はれ。

と、全くの同文が引かれていることから明らかに明らかであり、卷七「二門都落」にも「生ある物は必ず滅す。樂盡て  
悲来る」といにしへより書をきたる事にて候へ共」とあることから、うなづける。よって、卷二「大納言死去」  
にも大納言成親卿の北の方の様子を

さる程に時うつり事さ（ツ）て、世のかはりゆくありさまは、たゞ天人の五衰にことならず。  
と語っているのも『本朝文粹』（もしくは『和漢朗詠集』）の受容と考えてよからう。

しかし、卷十「維盛入水」の章の「會者定離」について古典大系本の頭注では「會者定離は涅槃經に「合會す  
れば別離あり。」と簡潔に記し、新古典大系本の脚注でも「生者必滅」も含めて「夫盛必有衰、合會有別離」（涅  
槃經）」と記す。

そこで『涅槃經』の該当箇所をみると、

一切諸世間 生者皆歸死 壽命雖無量 要必當有盡 夫盛必有衰 合會有別離 壯年不久停

盛色病所侵 命爲死所吞 無有法常者 (第十二卷・三七三頁 a)

とある。しかし『撰集百緣經』には「高者亦隨墮 常者亦有盡 生者皆有死 合會有別離」(第四卷・二〇七頁 a)とあって「生者必滅 會者定離」に近い意味合いになっているし、『佛說方等般泥洹經』には「萬物皆無常 合會有別離」(第十二卷・九二二頁 b)ともあって気にかかるが、『往生要集』には『涅槃經』とほぼ同文を引いている(第八十四卷・三九頁 a)ことを考えると、經・論・釈・疏等には「合會有別離」が一例みられる中で両大系本が『涅槃經』を頭注に挙げるのは妥当であろう。

しかし、「合會有別離」と同意とはいえ、「會者定離」とは句として異なっており、『涅槃經』をその出典とするのには疑問があり、両古典大系本も「出典」とまではしていない。「會者定離」の句は經・論・釈・疏等にはみられず、先にあげた蓮如の御文のみである。

## 五

さて、『平家物語』の序章たる巻一「祇園精舎」の章において、二つの喩えが語られている。「春の夜の夢」と「風の前の塵」である。これはいずれも単なるはかなさを表わす喩えではなく、春の世の夢はまた覚めておらず、風の前の塵はまだ吹き飛ばされていないことから、前述の『仁王經』『護国品』の偈の意味するところの喩えとして理解されるべきであり、この両者について、古典大系本では何も触れていないが、新古典大系本の脚注が「ともにほかないものの譬え」としているのは、淡白すぎるくらいがある。それはさておき、この両者の出典につい

て新古典大系本の脚注では「往生講式などにみられる」とする。「往生講式などに」とあるように出典が『往生講式』（禪林寺永観著）とは断定していないが、今、『往生講式』の該当部分をみると、

一生是風前之燭。萬事皆春夜之夢。豈只安然眠床上乎。無常忽至何得逃焉。（第八十四卷・八八〇頁c）

とあって、「春の夜の夢」はそのままであるが、「風の前の塵」ではなく「風前之燭」であって、「塵」とはなっていない。

そこで、経・論・釈・疏等はその用例をみると、「春の世の夢」について、はかないものの喩えとして「春夜」や「夢」が用いられている用例が多いが、「春の夜の夢」という用例は『往生講式』のみである。また「風の前の塵」については、「塵」ではなく「燭」もしくは「燈」とする例が『往生講式』の他にもみられる（「風前」単独の用例は多いがそのほとんどははかなさをいうものではない）。

・ 思惟之見未多分明。如風前燈照物不明。故云粗見。（『観経疏傳通記』・第五十七卷・五四〇頁c）

・ 盛者必衰。會者必別。命草上露。身風前燈。無臺此世。無憑我身。（『溪風拾葉集』・第七十六卷・八七三頁a）

・ 明日マデモタモチガタク。出ルイキ。入ルイキヲ待ザル。風前暫時ノ燈ニ。深ク久クタノミヲカケテ。違順

ニ隨テ或ハ喜ビ。或ハ愁フ。（『光明藏三昧』・第八十二卷・四五六頁b）

・ 禍福慶殃等ハ俱ニ皆是夢ノ内ノタハフレ。風ノ前ノ燈ナル故ニ。（『愚要鈔』・第八十三卷・五五七頁a）

『往生講式』も含めてこれがすべてであるが（『観経疏傳通記』は我々が真理を明らかに見ることができないことを喩えたものであり、はかないことの喩えではない）、すべて「燭」・「燈」であり、「塵」とするものはない。

その中、唯一『開目鈔』のみが

其外ノ大難風ノ前ノ塵ナルベシ。(第八十四卷・二三〇頁b)

とするが、ここは『法華經』を棄てて念仏に帰依する者を強く非難する言葉であって、はかなさの喩えで用いられているのではない。

また、これらの用例をみると、すべて我が国の書であり、「風前の燈」という表現は我が国において生れたものであるかもしれない。

いずれにしても、「風の前の塵」という表現はなく、『平家物語』の該当箇所を『往生講式』と関連付けることは慎重でなくてはならない。

## 結

以上、『平家物語』の序章の「諸行無常」・「盛者必衰」について、經典をはじめ論・釈・疏・註を考察し、「春の世の夢」・「風の前の塵」についても検証した。

すなわち、「諸行無常」という句と「盛者必衰」という句は、諸經典等において直接には対にはなっていない。それを『平家物語』は並べて掲出しているのである。もちろん、そこに文学的な作為がはたらいっているのであるが、単に典故等を指摘するだけでなく、なぜこの両句を掲出したかという文学的作為についても考えてみる必要があらう<sup>(5)</sup>。

また、「春の世の夢」・「風の前の塵」にしても、特に「風の前の塵」が『平家物語』作者の創作であるとは考えにくい。『平家物語』作者が何を見、またどう受容したのか。この点についても検証する必要があるだろう。

少なくとも、諸々の経・論・釈・疏等にはその答えはなかったが、その中、興味深いものがあつた。先にも引用した『溪風拾葉集』<sup>6)</sup>である。

三界皆苦ナリ。四生樂ニ非ズ。一期は假リノ棲。萬年夢ノ如シ。名官久シカラズ。榮華終リ無シ。繁昌ハ時ノ程。昇人刹那ナリ。妻子ハ身ノ敵。眷屬ハ心怨。貪欲ハ苦ノ本ヒ。追求ハ愁ノ端シ。生有レバ滅有リ。樂有レバ苦有リ。盛ル者ハ必ズ衰フ。會者ハ必ズ別ル。命ハ草ノ上ノ露。身ハ風前ノ燈。墓無キハ此ノ世。憑一無キハ我身ナリ。(第七十六卷・八七三頁 a 原漢文)

これは、今回問題にした『平家物語』序章中の句に似通つた表現が多く、卷十「維盛入水」の章の「生者必滅會者定離」の表現、また、先に触れた蓮如の御文(二帖目第七通)の「盛者必衰 會者定離」の表現にも濃厚に似通っている。気になるところである。

今回は経・論・釈・疏等に限って検証したが、次には文学作品について検証する必要がある。次を期したい。最後に一言付して筆を擱く。

親鸞・蓮如の著述において、「無常」という語の用例は当然あるけれども、「諸行無常」という句の用例はない。「諸行無常」という用例は、『佛説無量寿経』・『佛説觀無量寿経』・『佛説阿弥陀経』のいわゆる浄土三部経にもな

く、七高僧の著述においても、先に触れた源信の『往生要集』が四句偈を引く以外にはない。

また、「盛者必衰」にしても蓮如の御文にあるだけであり、浄土三部経はもちろん七高僧も親鸞も用いていない。

さらに、「春の夜の夢」・「風の前の塵」にしても、「夢」や「幻」、また「塵」(単独の他に「十方微塵」・「微塵」・「和光同塵」等々)の使用例はあるが、「春の夜の夢」・「風の前の塵」の使用例はもちろん、「風の前の燈」も浄土三部経・七高僧・親鸞・蓮如にはまったくない。示唆的であり、興味深いところである。

注

- (1) 『平家物語』の本文は日本古典文学大系本(昭和三十四年二月・岩波書店)による。
- (2) 引用について特に断らないものは、すべて『大正大藏経』による。
- (3) 渡辺貞磨先生著『平家物語の思想』(平成元年三月・法蔵館)九〇頁。
- (4) 新日本古典文学大系『本朝文粹』(一九九一年六月・岩波書店)三七二頁。
- (5) この『平家物語』序章の「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはず」について、古典大系本の「補注」でも指摘するように、祇園精舎の鐘の音は、『祇園寺凶経』が説くように実際に「諸行無常」と鳴り響き、沙羅双樹の花の色は『涅槃経』に説くように実際に白く変じた(経典では花ではなく双樹であるが)と受け取る、すなわち「仏教上の無常観や盛者必衰観」が観念的に説かれているというのではなく、実際の「不可思議靈異」の「祇園精舎物語」や「涅槃物語」として受け取るべきである。ここにも説話文学的作為という視点から考えてみる必要があるが、拙稿の目的ではないので、今は指摘するにとどめておく。
- (6) 光宗記。日本天台の顕密法門等に関する作法口伝を抄録したもの。最も古い奥書は延慶四(一一三二)年、最も新しい奥書は貞治三(一一六四)年である。